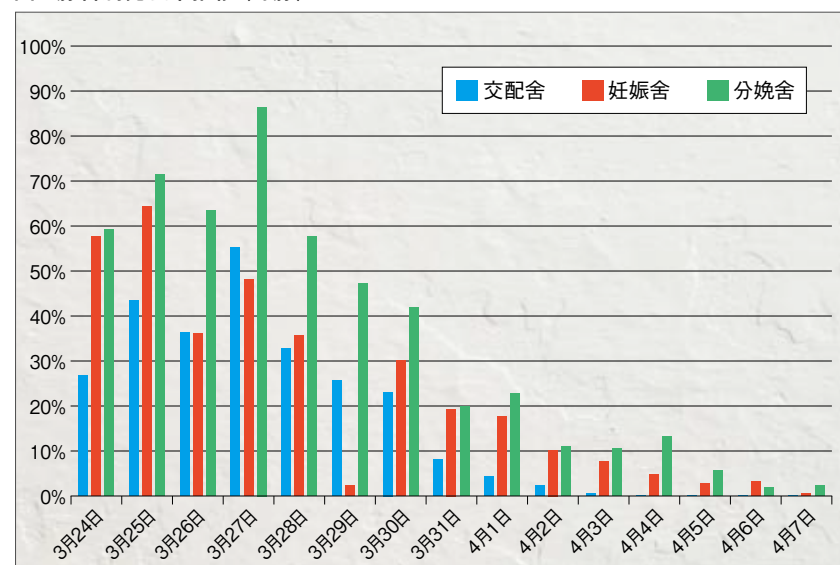
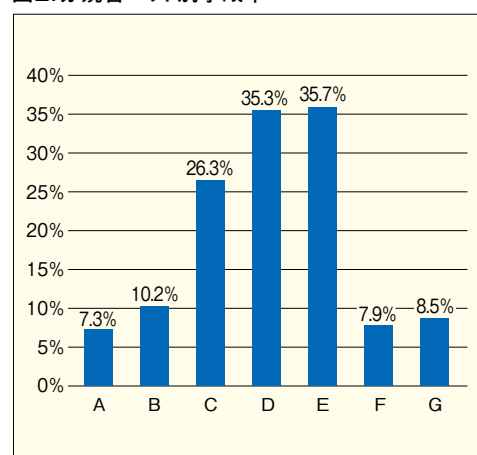


図1. 豚舎別発症率推移（母豚）



※発症：食欲の低下、嘔吐、下痢症状を呈した状態 ※発症率：各豚舎の在庫頭数に対する発症豚の割合

図2. 分娩舎ロット別事故率



PED浸潤から立ち直る！ 8つのポイントと実践事例

CASE
STUDY

豚流行性下痢 (PED) は初発からの感染スピードが早く、
ほ乳豚においては時に死亡率が100%に達することもある。
今回は、PEDが発生した農場を事例に、
被害を最小限に抑えるために行った対策について紹介する。



所在地：九州地方 飼育頭数：母豚500頭

給水器を用いたほ乳豚への補液

分娩舎中心の3つの対策

PEDは生後間もないほ乳豚で特に大きな被害をもたらした。母豚は発症による泌乳量の低下・停止が認められたため、対策は3つの点を中心に行った。

① 豚舎の消毒・洗浄

ウィルスの量をいかに減らしていくかが重要であるため、消毒は1日2回実施し、通路やストール内の下痢便、嘔吐物もあわせて洗い流した。その際、下痢便の飛び散りによる感染拡大を防ぐため、消毒ノズルを飛び散りが比較的小さい目の細かいタイプに変更した。

② 母豚への対処

PED感染の影響で泌乳の停止した母豚は早期離乳しほ乳豚は人工哺育した。また、全ての母豚に生菌剤を連続的に投与した。

③ ほ乳豚への対処

下痢がひどい個体には水分を与え続ける必要があるため、補液剤と生菌剤を混ぜ継続的に与えた。この際、生後処置や去勢などの一般管理は可能な限り遅らせ、不用意に子豚に触れないよう注意した。

本農場では抗生物質や補液剤の注射といった個体

発生初期の5つの対応

本農場は2014年3月にPEDの発生が認められた。初発は離乳舎で確認され、翌日には他豚舎へも急速に拡大。初発からわずか3日で、農場全体のあらゆるステージの豚に食欲の低下、嘔吐、下痢の症状が認められた。

PEDの早い感染スピードに、農場では当初混乱する場面もあった。しかし焦って作業することで、かえって感染を拡大させる恐れがあったため、本格的な対策を行う前に、まず次の5つの点について準備をした。

① 作業員の固定

各ステージの担当者を専任とし、特に分娩舎ではPED発症の有無で担当を分けた。

② 資材の調達

ほ乳豚の下痢に備えて、補液剤や代用乳を用意。また、紙つなぎ、手袋、長靴、消毒剤などの防疫資材を十分量用意した。

③ 作業手順の確認

各豚舎に専用の長靴、使い捨ての紙つなぎ、手袋を設置し、入退室のルール作りを行った。

④ 症状の記録

農場全体での感染状況、被害状況を把握するため、全てのステージでPEDが疑われる3症状（食欲の低下、嘔吐、下痢）を毎日記録した（図1）。

⑤ 知識の整理

管理獣医師がPEDという病気の特徴について説明

ごとの処置は最小限にとどめ、消毒や補液作業の時間を確保することとした。

対策後の状況

ほ乳豚の事故率は、部屋別で最大35.7%となった（図2）。最も多かったのは、発生時に分娩が始まったロットでの事故だ。最終的には6週間分のロットが被害を受け、その事故率は22.6%であった（表）。

数字上では他農場に比べ事故率が低かったが、多くの子豚は十分な手をかけることができず死んでしまった。分娩担当者が「ずっと良くなる」という前向きな気持ちを持ち続け、農場全体では衛生管理を徹底。落ち着いて現状を整理し対策を行ったことで被害を最小限に食い止めることができた。今後とも再発生に備え防疫体制を強化するとともに、いつ何が起きててもよいように備えをしていきたい。

表. 分娩ロット別事故状況

ロット番号	分娩日	分娩腹数(頭)	哺育開始(頭)	死亡(頭)	事故率	離乳日	備考	発症順
A	3月1日 ~ 3月8日	24	275	20	7.3%	3月27日	3/26~症状発現	2
B	3月8日 ~ 3月13日	24	255	26	10.2%	4月3日	3/26~症状発現	2
C	3月12日 ~ 3月20日	24	262	69	26.3%	4月10日	分娩舎PED初発(3/24)	1
D	3月20日 ~ 3月27日	23	241	85	35.3%	4月17日	PED発症	3
E	3月24日 ~ 4月3日	24	252	90	35.7%	4月24日	PED発症	3
F	4月1日 ~ 4月10日	24	240	19	7.9%	5月1日	発症認めず	—
G	4月5日 ~ 4月17日	24	246	21	8.5%	5月8日	発症認めず	—
PED発生ロット合計 (A~E)		119	1,285	290	22.6%			